

インシチュアテックと

データマネジメント

【第2回】インシチュアテック導入の前提となるデータマネジメント

有限責任あずさ監査法人

金融事業部パートナー 大橋 泰二

1. インシチュアテックがもたらす影響とデータの意味

用いて活用する/または生み出されるデータの品質が確保されている必要がある。

またそれは、適切な使い方が設計されなければ期待された価値が創出されないことや、データの品質が確保されていないければ誤った判断につながるリスクがあることも意味している。特にデータは、今後の重要な経営資源としての認識から「新たな原油」とも呼ばれることもあるが、同時に大火事を起こさないためのマネジメントも重要なことになってくる。本稿では、テック活用におけるデータの意味や具体的な事例と、同時にデータ活用における留意事項を、規制対応の観点を含めて概説する。

2. AIや機械学習、データアナリティクスによる価値創造サイクルの例

(1) 引き受け、査定
さまざまな情報を収集して総合的な判断を下すという業務の特徴から、テクノロジー活用の余地は大きい。図表1に示すように、新しい種類の情報を含めた情報収集の自動化や、リスク評価やそれに基くプライシング業務の一部自動化、さらにはデジタル化した顧客サービス等が期待される。単純な自動化によるコスト削減や、プライシ

ング最適化、さまざまな情報を考慮することによる契約者の裾野拡大等も期待できる一方、外部データの活用や、それらを用いた自動判定アルゴリズム等の導入については慎重論も多い。後述する規制からも読み取れるように、人間に代わってAIが判断するような自動化については、導入に当たってのハードルが高まる可能性がある。

(2) 保険金支払い
請求を受けた際の対応は、契約者から早急な対応が求められる一方で必ずしも十分なデータが揃っていないことも多く、データのギャップが起きやすい領域の代表例である。特に損害保険の領域では、診断書等の信頼性の高い情報が必ずしもない中で判断を行う

ことも多いため、テレマティクスやドライブレコーダー等を利用した新しい種類のデータの収集の試行も進んでいる。既存のデータやこうした新たに収集したデータを活用し、リスクアプローチの観点から、低リスク請求の特定と自動処理を進めることで人間が高リスク案件の精査に集中できるようにしたり、類似する不正事例を自動で提示することで人間の判断をサポートするといったアプローチが理

想である。

(3) 募集時の行為規制
これは保険に係らずあらゆる金融機関で取り組みが進む領域である。不適切な保険募集行為を防

第1回で述べたように、インシチュアテックの取り組みは保険のバリュチェーン上のあらゆる領域において、多岐にわたる技術を用いる形で検討・導入されている。これらの取り組みが保険のビジネスモデルに大きな影響を与えることに異を唱える人は少ないだろうが、同時に、現行の取り組みの全てが成功することを期待している人も少ないだろう。インシチュアテックの成否には、先端技術としての優位性はもちろん、その技術がユーザーの課題を真に解決する適切な使い方が設計されること、その技術を用いて活用する/または生み出されるデータの品質が確保されている必要がある。

インシチュアテックとデータの関係性が最も分かりやすい領域はデータ分析、オートメーション、AIであろう。これらの領域では、目的に沿ったツール・アルゴリズム・モデルを設計し、準備したデータを投入することで処理を自動化したり、人間の判断・アクションを支援するためのさまざまな結果を出すことが特徴である。具体的にここでは、どのようなデータがどのような価値につながっているのか、インシチュアテックの導入事例が多い三つの領域に絞ってそのサイクルを紹介す

る。

ことも多いため、テレマティクスやドライブレコーダー等を利用した新しい種類のデータの収集の試行も進んでいる。既存のデータやこうした新たに収集したデータを活用し、リスクアプローチの観点から、低リスク請求の特定と自動処理を進めることで人間が高リスク案件の精査に集中できるようにしたり、類似する不正事例を自動で提示することで人間の判断をサポートするといったアプローチが理

想である。

(3) AI領域(NY DFS)

保険引受において外部データやアルゴリズム等を利用する場合の、データ品質確保や契約者への説明責任に関する要請事項を定め、判断基準のラックボックス化を防ぐための規制である。保険会社はデータとテクノロジー両方に対して自社としての検証と、高い説明責任が求められることになる。たとえデータの網羅性や一貫性が保ていたとしても、そもそものデータの信頼性が保てていなければ説明責任が果たせるわけはなく、計算の結果に依拠することは危険である。

いずれも、現時点では特定の領域・地域における法規制ではあるものの、こうした法規制の登場が、データ全般に対する監督当局のスタンスに与える影響は少なくないだろう。

法規制等における特筆すべき文章については図表2参照。

またそれは、適切な使い方が設計されなければ期待された価値が創出されないことや、データの品質が確保されていないければ誤った判断につながるリスクがあることも意味している。特にデータは、今後の重要な経営資源としての認識から「新たな原油」とも呼ばれることもあるが、同時に大火事を起こさないためのマネジメントも重要なことになってくる。本稿では、テック活用におけるデータの意味や具体的な事例と、同時にデータ活用における留意事項を、規制対応の観点を含めて概説する。

インシチュアテックとデータの関係性が最も分かりやすい領域はデータ分析、オートメーション、AIであろう。これらの領域では、目的に沿ったツール・アルゴリズム・モデルを設計し、準備したデータを投入することで処理を自動化したり、人間の判断・アクションを支援するためのさまざまな結果を出すことが特徴である。具体的にここでは、どのようなデータがどのような価値につながっているのか、インシチュアテックの導入事例が多い三つの領域に絞ってそのサイクルを紹介す

る。

ことも多いため、テレマティクスやドライブレコーダー等を利用した新しい種類のデータの収集の試行も進んでいる。既存のデータやこうした新たに収集したデータを活用し、リスクアプローチの観点から、低リスク請求の特定と自動処理を進めることで人間が高リスク案件の精査に集中できるようにしたり、類似する不正事例を自動で提示することで人間の判断をサポートするといったアプローチが理

想である。

(3) AI領域(NY DFS)

保険引受において外部データやアルゴリズム等を利用する場合の、データ品質確保や契約者への説明責任に関する要請事項を定め、判断基準のラックボックス化を防ぐための規制である。保険会社はデータとテクノロジー両方に対して自社としての検証と、高い説明責任が求められることになる。たとえデータの網羅性や一貫性が保ていたとしても、そもそものデータの信頼性が保てていなければ説明責任が果たせるわけはなく、計算の結果に依拠することは危険である。

いずれも、現時点では特定の領域・地域における法規制ではあるものの、こうした法規制の登場が、データ全般に対する監督当局のスタンスに与える影響は少なくないだろう。

法規制等における特筆すべき文章については図表2参照。

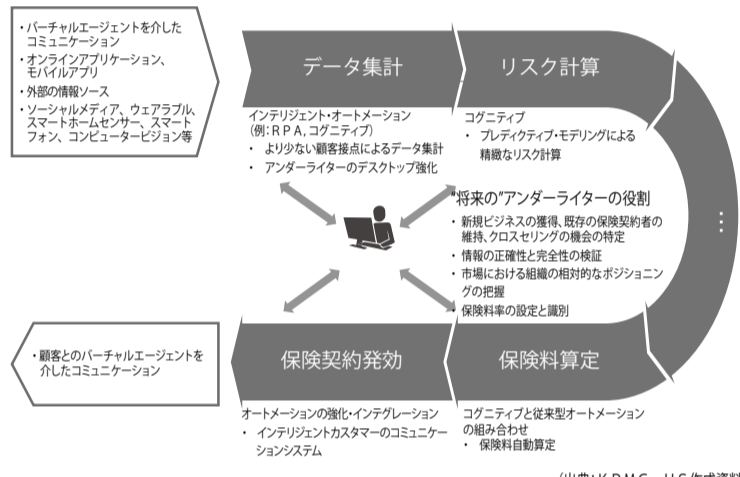


【大橋泰二(おおはし・たいじ)氏のプロフィール】

有限責任あずさ監査法人金融事業部パートナー。公認会計士。保険会社を始め多数の国内外金融機関に対する会計監査に従事するとともにデータマネジメントや規制対応に係るアドバイザリー業務にも多数従事。あずさ監査法人における保険セクターアドバイザリーリーダー。2003年〜2006年KPMG香港事務所駐在。

図表1は、データ集計、リスク計算、保険契約発効、保険料算定のサイクルを示している。データ集計にはインテリジェント・オートメーション(例: RPA, コグニティブ)が活用され、リスク計算にはコグニティブ・フレクティブ・モデリングによる精緻なリスク計算が行われる。保険契約発効には将来の「アンダーライター」の役割(新規ビジネスの獲得、既存の保険契約者の維持、クロスセリングの機会の特定、情報の正確性と完全性の検証、市場における組織の相対的なポジショニングの把握、保険料率の設定と識別)が果たされ、保険料算定にはコグニティブと従来型オートメーションの組み合わせによる保険料自動算定が行われる。

図表1



(出典: KPMG US作成資料)

図表2

BCBS239: A bank should be able to generate accurate and reliable risk data to meet normal and stress/crisis reporting accuracy requirements. Data should be aggregated on a largely automated basis so as to minimise the probability of errors. NY DFS 504: Each Transaction Monitoring and Filtering Program shall require the following, to the extent applicable: (略) 2. validation of the integrity, accuracy and quality of data to ensure that accurate and complete data flows through the Transaction Monitoring and Filtering Program; 3. data extraction and loading processes to ensure a complete and accurate transfer of data from its source to automated monitoring and filtering systems, if automated systems are used; NY DFS Insurance Circular No.1 (2019): The insurer must establish that the external data sources, algorithms or predictive models are based on sound actuarial principles with a valid explanation or rationale for any claimed correlation or causal connection. An insurer must also disclose to consumers the content and source of any external data upon which the insurer has based an adverse underwriting decision.

4. データマネジメントに係る取組みの展望

さまざまな領域で新規データの創出・活用や、データ分析・処理の利活用が今後も進むことについては誰も疑う余地を持たないだろう。同時に、対象となるデータの管理には多くのコストが掛かることも多く、またデータ活用が人間のコントロールを超えて意図せざる結論につながることを避けるための要請も今後増えてくるだろう。

こうした点を踏まえると、当面の間はRPA等による業務の自動化や、人間が判断を行うための補佐役・助言役としてのデータ分析やAI機能に関する導入・推進が最も活発化することが想定される。同時並行で、AIによる判断が人間の意思したとおりになることを確保するためのAIに対する内部統制の強化が進むだろう。またソーシャルメディア等の主観性が高い情報よりも、客観性の高い写真情報やログ情報、さらには社内眠っている過去データの活用等に焦点が当たることが考えられる。こうした展望を踏まえ、第3回では、身近になったデータ分析・視覚化に焦点を当て、保険業界において今後起き得るイノベーションの方向性や具体例について述べる。(つづく)